

基本的信頼感の発達的变化

— 小学生から大学生に関する横断的研究 —

相良 麻里

(平成 18 年 10 月 5 日受理)

Developmental Changes in the Sense of Basic Trust

— A Cross-sectional Study of Children and Adolescents —

SAGARA, Mari

(Received on October 5, 2006)

キーワード：基本的信頼感，発達的变化

Key words : basic trust, developmental changes

現代の社会は、格差・国際化・少子化社会などと呼ばれ複雑な文化、社会的環境のもとに多極化した価値観に覆われている。それに伴い様々な諸問題・病理現象が多発し、この状況はますます複雑さを増し、重要且つ大きな局面を迎えている。この状況は、社会を生き抜く望ましい人間的発達のために重要である適切な発達課題の履行にも多大な影響を与えている。

Erikson (1959) によれば、人間のライフサイクルの最初の時期(生後1年間)における発達課題として、基本的信頼感(sense of basic trust)の確立があり、この時期の危機を解決することで得られる基本的信頼感はその以降の発達段階においても重要な意味を持ち続けるものとされている。そしてErikson(1968)はライフサイクルにおいて、発達の段階を8つに分類し、それぞれの発達段階と達成すべき課題及び自我の特質を相対する2つの心的状態であらわし、その上で獲得する課題について次のように提示している。

- ①乳児期 基本的信頼対不信 → 希望
- ②早期児童期 自立性対恥と疑惑 → 意志力
- ③遊戯期 自発対罪悪感 → 目的
- ④学齡期 勤勉性対劣等感 → 自己効力感
- ⑤青年期 同一性対同一性混乱 → 忠誠心
- ⑥成人前期 親密性対孤独 → 愛

- ⑦成人期 生殖性対停滞性 → 世話
- ⑧老年期 自我の統合性対絶望 → 英知

Erikson (1968) のライフサイクル論の基本原理は、自我はいくつかの発達段階における危機を乗り越えながら自我同一性を達成していくことにある。彼は、リビドーの存在を認め、それが各器官に順次移行していくというフロイト理論をもとに、このリビドー的欲求の増大が自我の発達と内的統一性に関連し、社会的自己同一化の発達に欠かせないと主張している。そして、人間の発達は、幼児期から様々な内的葛藤・外的葛藤・危機に直面しながら、自我の発達にあらかじめ予定された課題(心理社会的危機)を設定していると考え、(自我はその段階の課題を達成しなければ、次の課題へ取り組むことができない。)発達課題を履行し、健康なパーソナリティを獲得するためには、それらの葛藤・危機を克服し、自己の内的統一性をはかりながら、個々の段階での課題を達成していくのである。

さて、これまでライフサイクル論について論じてきたが、彼が乳児期における発達課題に設定した『基本的信頼対不信→希望』は、基本的信頼対不信の葛藤から希望が現れてくることを意味している。この希望は未来であり、この未来への期待が次の段階へと向けられていくものである。不信が優勢では、未来への期待は衰退していつてしまう。つまり、この基本的信頼は、人間が生きていくで必要不可欠な課題であり、この課題の達成の有無が

その後の人生を左右するといっても過言ではない。

また, Erikson, Erikson and Kivnick (1986) の中でも, 基本的信頼と不信の間の緊張は, 人生の極めて初期にまでさかのぼる課題であり, その時期にある健康な乳児は, 頼りになる支えと反応を環境から与えられることにより基本的信頼を獲得し, 希望の源を発達させることが示されており, その重要性が指摘されている。この基本的信頼は, 人間が社会へ適応するための能力の基盤となりうるものである。基本的信頼の根底的な損傷や, 基本的不信の優勢というような現象は希望という活力をうみだすことが出来ないネガティブなものである。健全なパーソナリティ形成には, 基本的信頼という精神的な安定の基盤が重要なものであると考えられる。

Erikson and Erikson (1997) は児童期と成人期を繋ぐ青年期に忠誠という強さの出現を仮定できるとすれば, それは信頼する能力の再生であるとし, 信頼と忠誠は漸成的に関連をもつとし, その後の発達段階の達成にも深く関わってくるものなのである。

すなわち, 現代社会の様々な問題の解決の糸口を探るとき, 今日においてその基本的信頼感の達成の困難さが推測され, 基本的信頼感の測定が重要になってくるのである。

ところで, こうした基本的信頼感を測定する尺度は従来, 様々な研究者によって開発されている。

例えば Rasmussen (1964) や Rosenthal, Gurney and Moore (1981) の自我同一性尺度においては, 第1段階下位尺度として基本的信頼感を測定する尺度が提案されている。しかしこれらは Erikson (1959) の示す基本的信頼感を十分反映していないことや, 因子分析等によって構造が確認されていないことなどを考えると, 尺度としての妥当性に問題があるという指摘もある(谷, 1998)。実際に尺度項目を見てみると, 基本的信頼感に関するものと対人的信頼感に関するものの両者が含まれており, これを1次元的な尺度とみなすのは難しいように思われる。一方, 谷(1996)は日本の大学生407名の回答について因子分析を行い, 基本的信頼感尺度を作成している。これによると, 基本的信頼感とは2つの下位尺度からなっており, 基本的信頼感の中核的な内容に相当する「基本的信頼感」と, 他者についての信頼感をあらわす「対人的信頼感」とがあり, 前者は Erikson (1959) の漸成発達理論において仮定される基本的信頼感を測定するものとみなしてよく, 後者はむしろ現実の人間関係に基づく感

覚を測定するものであるという。

ところで基本的信頼感が加齢とともにどのような変化を示すかという点については従来あまり検討されていないように見受けられる。相良(2006)においては基本的信頼感の発達について扱ったが, Erikson(1959)の漸成発達理論を中心にしたものであり, 谷(1996)の主張するような対人的信頼感についての検討はなかった。そこで本研究では, 基本的信頼感および対人的信頼感の両面における加齢変化についての検討を行うことにしたい。

【方法】

質問紙の構成

谷(1996)の基本的信頼感尺度(11項目)をそのまま使用した。これは2つの下位尺度(基本的信頼感, 6項目; 対人的信頼感, 5項目)からなっており, 具体的な質問項目の例としては, “自分自身のことが信頼できないと感じることがある”(基本的信頼感), “普通, 人はお互いに誠実にかかわりあっているものだと思う”(対人的信頼感), などである(表1)。これらの表現がどの程度調査対象者自身に当てはまるかという点に関し, 1(全く当てはまらない)から5(とてもよく当てはまる)までの5段階評定を求め, そこから下位尺度ごとの評定値合計点を計算した。

なお谷(1998)によれば, “基本的信頼感”の下位尺度に含まれる項目は, Erikson (1959) の記述に忠実に作成されており, 漸成発達理論において意図されていた基本的信頼感に近いものと言えるのに対し, “対人的信頼感”の下位尺度項目は Rasmussen (1964) の自我同一性尺度を参考に作られているという意味で, Erikson の意図する基本的信頼感における“他者への信頼感”とは概念的に多少異なっており, より現実の人間関係の中で形成されるものと考えられ, 乳児期の経験を根拠として形成されると仮定される基本的信頼感とは異なる性質を持つという。

表1. 基本的信頼感尺度(谷, 1996)

<p>「基本的信頼感」</p> <p>私は自分自身を十分に信頼できると感じる。 人生に対して, 不信感を感じることもある。*</p> <p>物事がうまくゆかなくなると, 自分の中に引きこもってしまうことがある。*</p> <p>自分自身のことが信頼できないと感じることがある。*</p> <p>人から見捨てられたのではないかと心配になることがある。*</p> <p>失敗すると, 二度と立ち直れないような気がする。*</p>
<p>「対人的信頼感」</p> <p>一般的に, 人間は信頼できるものであると思う。 自分が困った時には, まわりの人々からの援助が期待できる。 普通, 人はお互いに誠実に関わりあっているものだと思う。 私には頼りにできる人がほとんどいない。*</p> <p>周囲の人々によって自分が支えられていると感じる。</p>

*逆転項目

調査対象者と手続き

東日本地域に住む小学6年生、中学2年生、高校2年生、および大学生の男女572名を対象に、無記名で質問紙への回答を求めた。なおそれぞれの対象者数および平均年齢は、小学生83名(11.86±0.31歳)、中学生88名(13.85±0.29歳)、高校生232名(16.85±0.28歳)、大学生169名(20.43±1.38歳)である。

【結果】

まず、基本的信頼感尺度(11項目)により得られる基本的信頼感の高さが、年齢および性別による対象者群によってどのように変化するかを図1に示した。しかし前述のように、2つの下位尺度は概念的に異なるものと考えられるので、別個に検討する必要がある。そこで“基本的信頼感”および“対人的信頼感”それぞれの評定平均値について、調査対象者群および男女別に集計したものが図2と図3である。

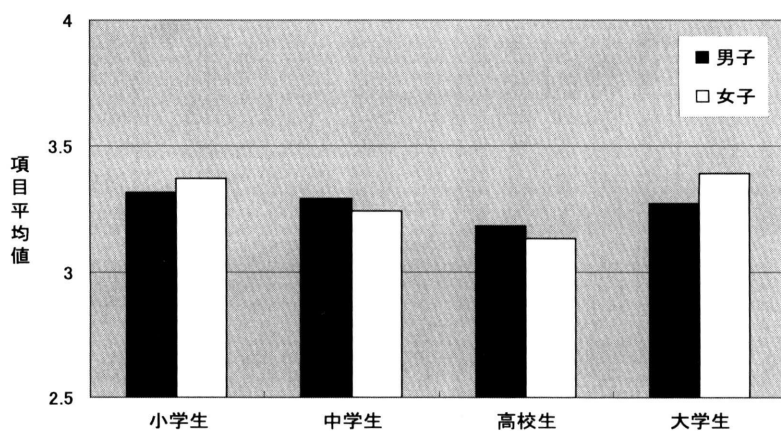


図1. 各対象者群における基本的信頼感尺度(11項目)の項目平均値

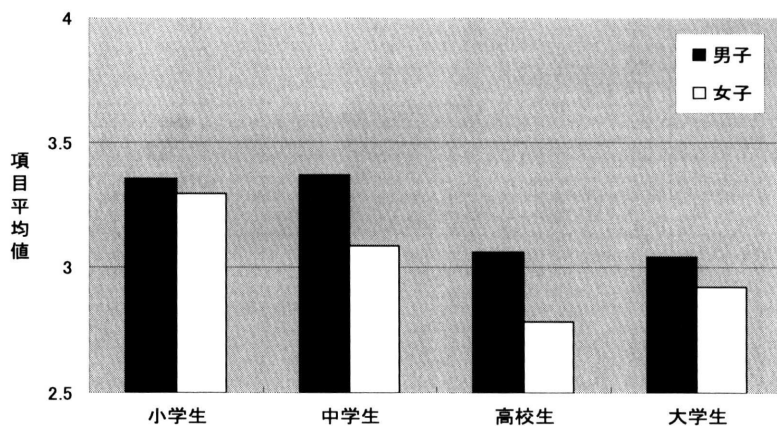


図2. 各対象者群における基本的信頼感(6項目)の項目平均値

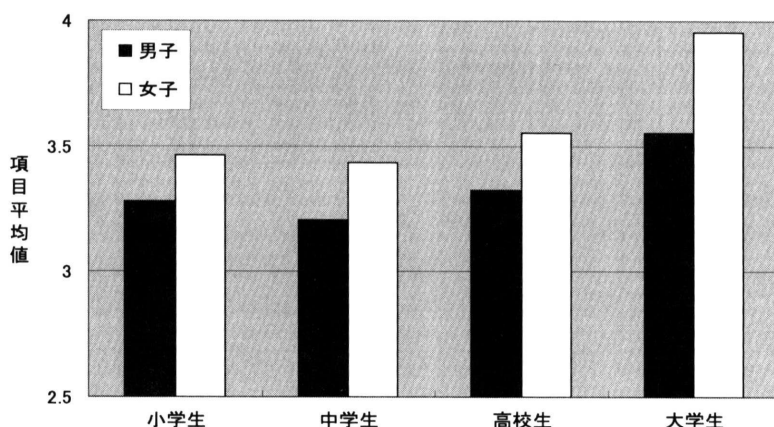


図3. 各対象者群における対人的信頼感(5項目)の項目平均値

基本的信頼感における年齢および性別の効果を検討するため、各尺度得点に関して、調査対象者群(小学生・中学生・高校生・大学生)および性別(男子・女子)をそれぞれ級間要因とする 4×2 の2元配置分散分析を行った。その結果、対象者群の主効果 [$F(3,564)=9.34, p<.001$]と性別の主効果 [$F(1,564)=8.41, p<.01$]が有意であり、交互作用は有意ではなかった [$F<1$]。そこで、対象者群の主効果に対する下位検定として多重比較を行った結果、小学生と高校生、小学生と大学生、中学生と高校生、中学生と大学生の間に有意差 [$p<.05$]が見られた。

対人的信頼感についても同様に、2元配置分散分析を行った結果、対象者群の主効果 [$F(3,564)=11.42, p<.001$]と性別の主効果 [$F(1,564)=17.52, p<.001$]が有意であり、交互作用は有意ではなかった [$F<1$]。そこで、対象者群の主効果に対する下位検定として多重比較を行った結果、大学生と他の3群との間に有意差 [$p<.05$]が見られた。

以上の結果から、基本的信頼感の小中学生よりも高校・大学生のほうがむしろ低下していること、対人的信頼感は大学で特に高くなっていることが分かる。また男女差については、年齢とは独立に、基本的信頼感には常に男子が、対人的信頼感には常に女子が高い値を示すことが明らかとなった。

【考察】

基本的信頼感の加齢変化について

結果から分かるように、基本的信頼感の小中学生においては比較的高いが、高校生以降で低下している。

この原因は定かではないが、複数の学校・クラスで実施した結果を各水準に均等に割り当てているため、地域差やコホートなどの効果が見かけ上の有意差となって現れているとは考えにくい。

おそらくこれには青年期特有の問題が影響しているものと考えられる。Erikson(1968)が主張するように、人間のライフサイクルにおいて最も不安定で危機に満ちた時期は青年期である。青年期は自己をとらえなおし、自己定義をはかり、自我同一性を達成していく段階であり、健康なパーソナリティ形成のために欠かすことのできない、人間形成の最も重要な時期である。しかしその反面、内的・外的葛藤に直面し、同一性拡散といった心理的危機に陥りやすい時期でもある。その結果、自己や他者に対する違和感を感じたり、否定的同一性を受け入れるなど、一時的に基本的信頼感を損なう状態となる可能性もある。本調査における高校・大学生においても、多くの対象者において同様の現象が起きているために、基本的信頼感の尺度得点が低くなったものと考えることができよう。

対人的信頼感の加齢変化について

対人的信頼感については、大学生のみが有意に高い結果であった。図1を見ると、加齢とともに徐々に上昇していくようにも感じられるが、高校から大学の間大きな飛躍があるのは確かである。大学入学前後は、多くの学生にとって社会経験の幅が広がり、様々な対人関係を新たに経験するようになる時期であり、対人的信頼感が現実の人間関係の中で形成されるものであること(谷, 1998)を考えあわせると、今回のような結果になることも理解できる。

基本的信頼感と対人的信頼感について

基本的信頼感と対人的信頼感は、異なる下位尺度であるため、両者を客観的に比較することは難しい。ただし図1から分かるように、同一の調査対象者であっても、両者は加齢とともに異なる様相を示す。小・中学生では評定平均にあまり差はないが、高校・大学と進むにつれて差が生じ、特に女子でその差が大きくなるのが見てとれる。これは谷(1998)が指摘しているように、両者が質的に異なる尺度であることを示すための手がかりとなるであろう。

【結論】

本研究では、谷(1996)の基本的信頼感尺度を用いて、小学生から大学生までの4群を対象とし、基本的信頼感および対人的信頼感の加齢変化について検討した。その結果、基本的信頼感は高校・大学で低下する傾向が、対人的信頼感は大学で上昇する傾向が見られ、両者は質的に異なる尺度であることが示唆された。

しかし今回得られた結果は、限られた対象者に関する横断的な調査に基づくものである。今後は縦断的な調査を含め、より詳細な検討が求められる。

【文献】

Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press.

Erikson, E.H. (1968). *Identity: Youth and Crisis*. New York: Norton.

Erikson, E.H., Erikson, J.M., and Kivnick, H.Q. (1986). *Vital Involvement in Old Age*. New York: Norton. (朝長正憲・朝長梨枝子(訳) 1990老年期—生き生きしたかわりあい。みすず書房。)

Erikson, E.H. and Erikson, J.M. (1997). *The Life Cycle Completed: A Review (Expanded Edition)*. New York: Norton. (村瀬孝雄・近藤邦夫(訳) 2001 ライフサイクル, その完結(増補版)。みすず書房)

Rasmussen, J. (1964). Relationship of ego identity to psychological effectiveness. *Psychological Reports*, 15, 815-825.

Rosenthal, D.A., Gurney, R.M., and Moore, S.M. (1981). From trust to intimacy: A new inventory for examining Erikson's stage of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, 10, 525-537.

相良麻里(2006). 現代の子ども・青年の生活と意識について：教育文化に関わって 東京家政大学博物館紀要, 11, 1-9

谷 冬彦 (1996). 基本的信頼感尺度の作成 日本心理学会第60回大会発表論文集, 310.

谷 冬彦 (1998). 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, 9, 35-44.

Abstract

The aim of the present study was to investigate the age differences in the sense of basic trust of 572 participants who were elementary school, junior high school, senior high school and undergraduate students using the Sense of Basic Trust Scale (Tani, 1996). The results showed a decrease in the sense of basic trust of high school and undergraduate students, and an increase in the sense of interpersonal trust of undergraduate students. It was suggested that two subscales of the Sense of Basic Trust Scale were different qualitatively.